

# 水産試験場研究評価委員会 評価のとりまとめと機関の対応方針

(中間評価)

事業名 (課題名)	河川漁場評価方法開発試験				研究 期間	令和4~8年度 (5カ年)	予算 区分	県単
研究の取扱基準 A. 計画を超えて順調 (このまま研究を継続) B. ほぼ計画通り (このまま研究を継続) C. 研究方法を修正する必要あり D. 研究を中止する必要あり								
委員名	1	2	3	4	5	6		まとめ
評価結果	B	B	B	B	B	B		B
主な意見								
<p>①研究目標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>発眼卵放流の重視と合わせて、自然の再生産を重視する観点も合わせて目標とすることが必要ではないか。</li> <li>河川漁場の利用促進は喫緊の課題であり、目標設定は妥当。</li> <li>河川漁協の経営改善と遊漁需要の変化に対応するものである。</li> <li>アマゴの発眼卵放流や増殖管理などの技術支援が求められている。</li> <li>研究の背景も詳細に検討している。</li> </ul> <p>②研究手法の妥当性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>親魚保護区の環境管理や運用についても合わせて検討することが望ましい。</li> <li>研究結果の今後の活用を踏まえた研究手法となっており、妥当。</li> <li>生息魚種に適した環境かどうかをまず判定する必要がある。餌についても確認してはどうか。</li> <li>調査結果に基づき、漁場評価や放流適地の選定等を実施している。</li> <li>普及も見据えた研究手法となっている。</li> </ul> <p>③計画の進捗状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>記録的豪雨による影響は、残念ではあるが自然相手なので失望する必要はない。</li> <li>豪雨等の影響はあったが、概ね計画どおりに進められている。</li> <li>県東部で豪雨災害があり計画延期となったが、やむを得ない。</li> <li>記録的豪雨による河川環境の変化により再調査が必要となっている。</li> </ul> <p>④研究の成果と発信</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>広範囲にわたる漁場でデータが蓄積されたことは高く評価できる。</li> <li>当初の想定に近い研究成果となっており、引き続き研究を進めてほしい。</li> <li>研究は漁協等に情報提供しながら行われている。</li> <li>調査結果について各漁協や組合長会議等で報告を行っている。</li> <li>現場への情報提供を適宜行っている。</li> </ul> <p>⑤今後の計画の妥当性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>アマゴ資源の天然の再生産と発眼卵放流などの人為的補填のそれぞれをどの程度に兼ね合わせるか十分な議論が必要。</li> <li>発眼卵放流の是非が大きなポイントとなるため、しっかりその効果を確認してほしい。</li> <li>今後、再調査や発眼卵放流により実証試験が行われ、効果調査が行われる。</li> <li>再調査を含めた各調査結果に基づき、実証試験を行う予定である。</li> </ul> <p>⑥総合評価 (研究の取扱)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>アマゴの発眼卵放流の効果を高めるための様々な知見が得られたことは、高く評価できる。ただし、長期的な視点からは天然の再生産と放流事業をどの程度にバランスさせるかの長期的構想が検討されることが望ましい。この構想の立案には本研究の成果が根拠として様々な利用できるはずである。</li> <li>遊漁資源の増殖は、河川漁協の収益増につながる重要な手法であると思う。環境変化により</li> </ul>								

資源の減少を来たさないように、河川漁協の経営安定に寄与する増殖技術の開発に期待する。

- 多くの内水面漁協は非常に経営が厳しい状況であり、本研究にあるとおり、遊漁者のニーズにあった増殖管理が必要である。よい成果を出し、上流部の漁協の優良モデルとなることを期待している。
- 調査結果に基づき、親魚保護区や遊漁区を設定する等、河川環境に即した利用形態を定める取り組みの効果を確認したのち、マニュアルが作成されて調査漁協以外にも普及することを期待する。
- アユ遊漁が低迷する中、各漁協からアマゴ遊漁の導入拡大が求められており、引き続き調査を実施し、実証試験で良い結果が出ることを期待している。
- 遊漁の多様化や遊漁需要の変化に対応し、河川漁協の経営改善を図ることは、喫緊の課題である。今後の研究を通じて、普及性の高いマニュアルを作成してほしい。

#### 機関としての対応方針

総合評価は「B」評価であり、ほぼ計画通りと判断する。

本事業では、遊漁需要の多様化に対応するためのアマゴ遊漁の導入拡大が河川漁協から求められており、河川環境に対応した増殖管理を行うため、河川調査結果に基づく河川漁場の評価及び区域分けを行った。

今後は実証試験によって増殖効果を把握していくとともに、委員会から指摘のあった天然の再生産と放流事業のバランスを考慮した長期的構想については、現在の天然資源が非常に少ない状況であるため、天然資源の増加が確認できれば将来的に天然の再生産と放流事業のバランスについて検討していく。

また、アマゴの資源調査と並行して餌料等の生息環境調査を行い、放流適地や生息適地の評価結果を基に普及性の高いマニュアルを作成して上流部の漁協の優良モデルとなるように研究を進める。